



薩摩藩英国留学生記念館
開館 10 周年記念

「旅立ちの地」エッセイコンテスト

準大賞

いちき串木野市観光特産品協会会長賞

海の色

永井 光洋 京都府

「海は、何色あるのだろうか。」

北緯七十度。北極での研究航海に乗船した僕は、ふとそう思った。森森たる海原ウミノハラに浮かんだ一社会は、今日も忙しい。この船には、国内外の研究者が乗船している。スケトウダラを求めて底引き網を下ろす人もいれば、ウミガラスを探して空を見上げ続ける人もいる。研究の対象も、方法も様々だ。もしかすると、それぞれの研究者には、それぞれの海があり、それぞれの海の色があるのかもしれない。

「海は何色か。」と聞かれれば、青色だと即答する人がほとんどだろう。「なぜかという……」と、海が青いメカニズムを、滔々と語り始める人もいるかもしれない。確かに、海は青色だ。でも、青色にも、いろいろな種類があるように僕は思う。海の色を決める要素は、たくさんある。まず、水と光の性質だ。太陽の光が海に入ると赤色系の

光が吸収され、青色の光が散乱して残るのだ。しかしそれ以外にも海の色を決定づける要素がある。例えば、空の色。海は空を反射する。それゆえ、晴れの日の方が海の色も鮮やかな青になりやすいことは想像に難くないだろう。加えて、海中のプランクトンも重要な要素だ。プランクトンが少なく、透明度が高いと海は青黒くなる。黒潮という太平洋を流れる暖流の名前も、このことに由来する。他にも、水深、海底の砂の色、天気など、多くの変数が存在する。

……というのが一般的な説明だ。もつといえ、自然科学的な説明だ。もちろん、この説明は正しい。しかし、何か物足りないように感じる。なぜなら、海を見る人間の存在を考えていないからだ。私たちは透明ではない。この目で周りを見渡し、感情を抱くことができる、人間だ。喜び、興奮し、怒り、悲しむ、人間だ。カラフルな感情は、景色に彩りを加えているのではないだろうか。

二〇二三年七月十一日。極北の港町、ノームにて研究船に乗り込んだあの日。沈まない太陽は厚い雲に覆われていたが、僕を照らしてくれているような気がした。寂れた埠頭から見えた海は、緊張と高揚がたつぷりと含まれた複雑な色をしていた。

七月二十八日。イルカの大群が観測できた日。飛び跳ねる水しぶきがまぶしくて、海の紺青が際立っているような気がした。

八月一日。三週間の航海を終え、函館に帰港した日。久しぶりに見えた北海道の地と右車線を走る日本車

に安堵した時、海もいつもの色に戻った。薩摩スチューデントの一人である長沢鼎の極西への旅路も、多様な海の色に彩られていたことだろう。

一八六五年四月十七日。留学生たちが羽島を出航した日。十三歳の長沢は、既に髪をばっさり切り、その毛髪を母親に託していた。覚悟を決めた彼が見た羽島の海は、どんな色だっただろう。

五月五日。香港を経て、シンガポールに入港した日。彼はこの日のことを、「広き浜辺に而音楽杯も有之候」と語っている。聞き馴染みのない音楽を聴きながら眺める海は、どんな色だっただろう。

六月二十一日。サウサンプトンに降り立った日。視線の先にあるものすべてが新鮮な異国の港町の海は、どんな色だっただろう。

薩摩スチューデントが英国留学を果たした百六十年前、旅は命がけであった。両親との一生の別れになるかもしれない。友との一生の別れになるかもしれない。その思いが染みこんだ海の色は、いつもの海よりも鮮やかだったのかもしれない。

「海は、何色あるのだろ。」

その答えを、僕はまだ知らない。先人の旅路を想像するたび、彼らは僕の知らない海の色を知っているのではないかと想像する。日常を抜け出して旅に出るたび、新しい海の色を発見する。次は、どこに旅に出ようか。次は、どんな色を見つけれられるだろうか。